

Dialog



Vol.167

世田谷区民合唱団会報

2024 年度 2 号
2024 年 8 月 発行

2024 年 8 月 10 日 土曜日、東京都合唱連盟・朝日新聞社主催の東京都合唱祭に 45 名の有志が出演しました。

場所は、中央区晴海トリトンスクエア内第一生命ホール、都営大江戸線 勝どき駅徒歩 8 分です。演目は「ボクはウタ」、指揮は杉山範雄先生、ピアノ伴奏は尾島紫穂先生、本番は 18 時 3 分開始でした。今回は着替えが出来ない為、私服での参加です。



白

4階 第一生命ホール前



勝どき駅地上出口

新宿から 23 分、都営地下鉄大江戸線の勝どき駅に到着です。地上にあがると、8月の猛暑、いえ激暑です。連日最高気温が35度以上という中の1日でした。唸るような暑さ、厳しい陽の光を受けながら目的地へ向かいます。ここは埋立て地、浜離宮や竹芝栈橋の先にあった海に出来た所でした。「グーグルマップで下調べして来て良かった！」と思いながら方向を間違わずに進みます。しばらく歩くと川がありました。いえ、運河です。

上を見上げると綺麗な真夏の青空、その中に今向かうトリトンスクエアの高層ビルがあります。

運河を渡る橋の左隣には屋根付きの動く歩道が設置されていました。

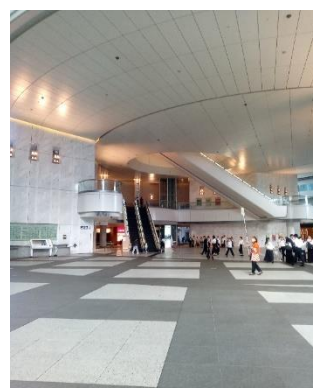
そして橋を渡り終えた先には、「どうぞ！」とでも言うかのようにエスカレーターがこちらを向いています。ここからトリトンスクエアですね。



案内板の後ろは運河と動く歩道



トリトンスクエア入口



ここは2階、そして3階4階へ

招かれるように1階から2階、そして3階、4階まで一気に上がると、そこは第一生命ホールでした。



←ホール内



先生方到着



杉山先生ステージ衣装に



集合写真 このままの衣装で舞台へ（入れなかった方、🙏）



300 近い数の団体が参加した合唱祭、その連日ではない
5日間が終わりました。

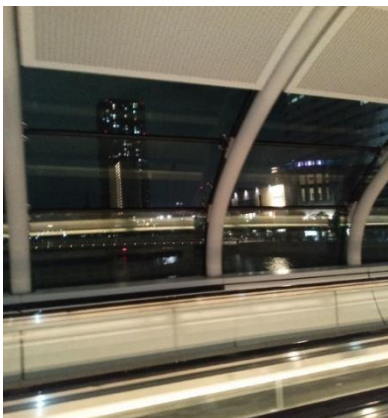
私達、世田谷区民合唱団は最終日の一番最後のブロッ
ク(16 団体)に参加し、始まりは 18 時頃、終わりは 20 時を
まわっていました。

お疲れ様でした 🎵

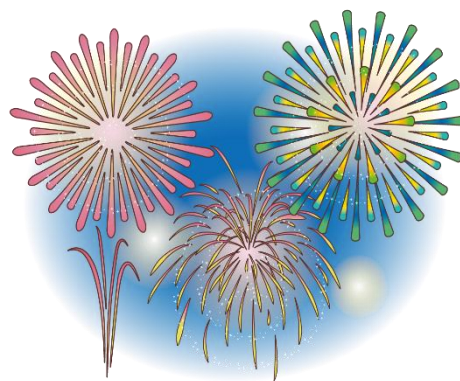
楽しい時間をありがとうございました。
また一つ素敵な思い出が増えました。

2025 年の合唱祭は 1 日増え 6 日間行われるそうです。

終わりました、お疲れ様 🍷



帰りの動く歩道から、外の夜景 🌃



🌸 3 名の方に東京都合唱祭の感想を伺いました。



🌈 都合唱祭に出演して 🌈

T10 田中富士夫

定かではないが、私自身の都合唱祭出演は、今回が3度目ではないか。
当団は13回連続出演というから、団員歴20年としては出演率は高くない。
団の公式活動の参加に不熱心との誹りは免れ難いところ。
演奏時間が短い、待ち時間が長い、会場が遠いという多分に屁理屈が出演しなかった理由。
考えてみれば、出演団体数約300、それを5日間で消化しようという恐ろしいばかりの大イベント、
時間や場所に制限があつて当然なのだ。
とまれ、一団員として団の活動には参加しなければと発起、今回は出演させて頂くことに。
さて、会場はというと晴海だという。
え！行ったことない、遠そう、行き方がよく分からない。
案の定、折からの暑さの中、行きつくのに結構な汗をかいた。
我が団の演奏は、最終日の16団体の一つ。
聴かせて頂いた各団、それぞれ持ち味があつて楽しいが、正直実力は玉石混交。
中で、20人ほどの混声だが、声、バランス、リズムいずれをとっても突出して素晴らしい演奏をした
団があつた。
大いに感心。
我が団の演奏とて、かなりのレベルにはあると思うが。
講評の程、如何？
それにしても、我が団出演者の構成年齢の高いこと。
飛びぬけていよう。
特に男声は、平均が余命年齢期にあるのではないか。
後ろから見ると、皆さん、おつむのてっぺんに大なる空き地が。
思わず微笑むが、何、歌う声はまだまだ若い者に負けない。
アタマ惚ける、目かすむ、耳遠い、滑舌悪い、節々痛む、が、ものともせず。
なお、暫く、合唱を続けられますように。
若見え(?)の女声の皆さんとご一緒したいこと、いうまでもない。

🌸『東京都合唱祭に出演して』🌸

B13 三留修平

昨年に続き、東京都合唱祭に参加した。合唱団の数の多さ、若い方の多さ、男声の多さ、運営の充実、参加者全員の熱意に驚かされる。全国的に合唱人口が減少し、コロナ禍で特にその傾向が強まったという認識が、少なくとも東京では間違っているのではという気持ちになる。

合唱団のレベルは様々だが、とにかく熱心で合唱好きという印象はすべての合唱団に感ずることであり、励みになる。声量の差は致し方ないが、子音をはっきりと歌うこと、強弱の強調、感情をこめて丁寧に歌うことで、レベルの差が生じやすいことは、指導いただいているすべての先生方から等しく学んだことだと改めて認識できた。

個人的には、定期演奏会の演目を舞台上で歌えるこの合唱祭は大変ありがたく、昨年同様、演奏曲に関してはそこそこ歌えるようになり、定演に向けてかなり自信を持てる点がうれしい。

当団に関しては、広報の立場から常に、世代の若返りと男声の強化を念頭において活動しているが、その観点から、

・適宜、参加合唱団で、男声が多く、若手がいて、タイアップに関心のありそうな合唱団に接触して、共演を持ち掛けてはどうか

と考えるに至っている。

今まで、若手、男声の直接入団活動を念頭に置いていたが、この合唱祭へ来ると、各団の構成や成り立ちから推測し、当団への入団が実現する確率は低いと判断せざるを得ず、何らかの形で共演をすることからとにかく始めることが実践的ではないかという気になってくる。

同時に、世田谷区内の現役大学合唱団員直接ではなく、そのOBや関係者を見出し、交流し、手始めに何らかの形で共演ができると面白いのではと、帰路、男声コミュニケーション委員と語りながら、家路についた次第である。

なかなか楽しく、様々な示唆を得た合唱祭であった。

🌻 ～合唱祭で「ボクはウタ」を歌って～ 🌻

A41 Harthan 亜矢子

この曲はコロナ時代に、困難が続く合唱活動を何とか盛り上げていきたいと、東京混声合唱団（以下、東混）が、「あなたの作った詩に人気作曲家・信長貴富氏が曲をつけます！」という粋なアイデアで一般公募し、245もの応募作品の中から生まれた曲です。

信長貴富氏は高校時代、管弦楽部でトロンボーンを演奏。上智大学文学部（教育学）卒業の元世田谷区役所職員で、1997年に作曲家として独立。音大でピアノや音楽の専門教育を受けたわけではないので、作曲は独学だそうです。大学在学時から編曲し、全日本合唱連盟の朝日作曲賞に何度も入選、2001年には日本音楽コンクール作曲部門で2位を受賞という注目の作曲・編曲家です。（Wikipedia 引用） コロナ禍では、飛沫を飛ばさない試みとして、日本人に

馴染みの深い曲“故郷”を、あらゆる年代がハミングだけで音を重ねられるよう編曲（ハミングのエチュード）して、合唱界の大きな話題になりました。

作詞者は世田谷区在住の江村美紀さん。パンデミックでは大きな制約を受けた合唱活動。江村さんは誰かと顔を合わせて歌うことが否定される世の中で過ごすうちに、ご自身が歌から遠ざかったような寂しさを感じ、“もしも「歌」に人格があったら？”というユニークな着眼点で詩を書いたのが審査員の心を掴みます。

合唱を存続させることが最も困難だったコロナ時代。団も合唱祭参加はおろか、通常練習、定演のキャンセルが続きます。合唱なんてもうあと 100 年無理？という風潮でしたが、そのような苦しい時代であっても合唱の灯を消さず、知恵と工夫で巧みにコロナ禍をくぐり抜けて団存続へと導いた当時の役員さんの底力と献身的な奉仕には頭が下がります。まさに世田谷区文化活動において、歴史的快挙であったと思います。パンデミックを経験した団員が、今、この時代の生き証人として時代を反映した曲を歌い、長い歴史を持つ世田谷区民合唱団の記録に残す事は、とても意義のあることだと思います。

今回の東京都合唱祭では 299 もの合唱団が参加し、団からは 45 名の方が参加しました。3 回の臨時練習が追加され、猛暑の中、はるばる遠方の神奈川県から大汗かきつつ駆けつけ指導を下さった杉山先生、本当にありがとうございました！

追加練習では、杉山先生の漫才に近い絶妙な表現に常時、爆笑。笑いすぎで腹筋振動の制御が大変でしたが（もしや新種の腹筋筋トレ？）、気づくと笑った直後は頬骨が自然と上がり、声が出しやすかったです。明るい雰囲気各センテンスの歌い方についての細やかな指示がありました。



—君が生まれたその夜、母の涙と揺れてた—

歌い出しの情景が、太陽さんさんと照る朝ではないので、“朝だーッ！（産んで）スツキリ！”という元気な感じではなく、しっとりと流れた“母の涙”のロマンチック感を出し、一つの生命が誕生した聖夜の雰囲気を漂わして欲しい”とのこと。なるほど、言われてみると、声楽プロ集団・東混さんの YouTube 動画も、この部分ではしんみりとした静かな雰囲気が漂っています。

—世界が僕を閉じ込めて 必要ないと切り捨てる
それでも僕は叫んでる 君の中で叫んでる—

コロナ全盛期では、合唱＝悪、みたいな扱いで、音楽（特に飛沫が出る歌）は不要不急と言われ、歌の存在自体が全否定されました。擬人化された『歌』ご本人にとってみれば、もはや軟禁状態。不要だと言われ、閉じ込められれば、ストレスと苦しさで叫びたくもなることでしょう。

この箇所を歌うに当たって、杉山先生から出されたリクエストは、“青年の叫び、思春期とまでは言わないけれども、若者の葛藤のような雰囲気を出して”とのことでした。ううッ。。。！当合唱団は平

均年齢が 75 歳です！私自身の思春期の記憶もそう簡単に蘇らない状態なので、内心、“そりゃ、大変だ！！”と苦笑しました。しかし、その直後、お隣のテノール・バスから聞こえてきた歌声は、ほぼ青少年の声だったのです！びっくりしました！さすが合唱歴の長いベテラン勢！お見事！！（すごく誉めてます）

続いてソプラノ・アルトの女声陣に対して杉山先生より出されたリクエストは、

ー誰かのことを想う時 色づいたー



甘酸っぱい思春期を思い出し、“色づいた”のところで、やや色気を出して欲しい。この急な要請に、私自身、子供を 2 回産み、無我夢中で育児を終えた今現在において、色気というものは遠い記憶の劣化ゆえ、蛇口をひねればすぐに出る水道水というわけにはいきません。努力して可能な限り甘い声にしてみたところ、声はうわずり、裏返りかかりました。真面目で不器用な性格上、もしかしたら、出した色気の代償に音を外した気がします。近隣の方々、申し訳ございませんでした。

この曲の最も難解のところは L 部分 (P 22)。全パートが叫ぶようにして“ボクはウタ！”という言葉を加速して重ねます。1箇所タイミングが狂うと、どんどん外れ始め、わけがわからなくなってしまいます。アルトの場合、5回“ボクはウタ”を繰り返しますが、杉山先生より、1 回目は“ウタ”を強めに叫んでスッと切り上げ、2 回目、3 回目においては、アルトの定番姿勢、“お先にどうぞ”的態度を一変させ、周りを押しのけ強気に主張する態度を演出して欲しいとのこと。そして 4 回目からスピードを上げ、5 回目の直後に間髪入れず“ウター！”と歌い叫んで、ピタッと止めます。最初は出るタイミングとスピード感を掴む事がとても難しく、なかなか出来ませんでした。そもそも私の音楽の拍感は腹時計支配。空腹・寒冷・不機嫌時は速め、新曲譜読み時は不整脈、季節の変わり目はホルモンバランスの影響を受けやすい。スピード感が加速していく箇所だけに、タイミングが完璧に把握出来ず、大抵、4 回目で迷子、5 回目は透明人間、決めの“うたー！”の“たー！”だけポーカーフェイスで再登場。この心配箇所、本番では、どうにかほぼ出来、自己判定 97 点。(キメの“ウター！”の“ウ”は言えず、“ター！”だけ叫びました。杉山先生、ごめんなさい。)

今回、第一生命ホールという素晴らしい会場で歌わせて頂き、合唱・ステージ経験が乏しい私にとって、あのような構造の会場は初体験でした。しみじみ実感するのは、わずか 10 分ほどの声出しで、ステージ上もパツと声を出すことの難しさ。声出しの時、杉山先生より、全体的に地声が強く頭声に切り替えられていないことが指摘されました。臨時練習時の桜丘ホールがとてもキレイに響く会場だったので、我が合唱団は、結構、良い感じに仕上がっているのでは？と錯覚しましたが、本番のステージ上では、練習時ほど響かず、客席に声が届いていないような気がして心配でした。特に今回の参加団体は 2～30 代の若者ばかり。彼らの声はまっすぐブレずに伸びていて、声量・音程が安定しており、結果、各パートとの和音も正確、ピッチも良くて素晴らしかった。特にプログラム最後から 2 番目のグループは、一人一人の発声がソリストに近いほどしっかりしていました。すると、驚いたことにホールが突如、特殊な空間に変わって、まるで息を吹き込んだ生き物のように反響音が増幅していったのです。びっくりして、思わず会場の造りを見回し、天井を見上げたほどでした。彼らの歌が終わった瞬間、審査委員の一人が高らかな拍手をし始め、別の審査員はブラ

ボー！と叫び彼らを褒めたたえました。一人一人が正しい発声方法を身につけて声を重ねると、構造の良いホールでは、あのように電源がつながったスピーカーのごとく鳴り始め、歌い手に応えてくれるのでしょうか？？？

この感覚を目撃出来た事は、とても貴重な経験でした。来年も、同じ会場で催されるとのこと。私達も1年後には皆でまた力を合わせ、精進していきたいねと、閉会后、1階下の居酒屋さんで、お馴染みの飲み仲間と日本酒を注ぎながら反省会をしました。声を磨いていくのに体力的に絶好調の若者には、到底、及びません。しかしながら、平均年齢75歳の私達が、「ボクはウタ」という、今どきの歌に挑戦し、あそこまでピッチを合わせて歌えたのって、かなり立派だ！私達は凄い！という結論で場内満場一致(6人)、幸福な気持ちに包まれて帰宅しました。いずれにしても、光り輝く太陽のごとく明るい黄色の衣装で身を包み、私達の進むべき方向(声・会場の入り口出口)を示し導いて下さった杉山先生、そして素晴らしい前奏・間奏のピアノで曲の雰囲気演出し、出だし直前のキー音、脇役の味付け効果音等、実に細やかな配慮を施した弾き方で私達をソツと助け、歌に下駄をはかせて下さったいつもキュートな尾島先生、お二方の匠の技に、心より敬意と感謝をお贈り致します。

多くの人の人生と生活を狂わせたあのパンデミックから4年が経過し、ようやく合唱活動も後ろ指を指されない雰囲気になってきました。当時、音楽家や声楽家達を悲しめたあの「不要不急の外出を避ける」という言葉。本当に「音楽、歌は人にとって不要不急」だったのかというと、私達がこの体験で獲得した真実は、「音楽・歌は不要不急なんかじゃない。逆だ！困難の時こそ歌は人の心を内側から強く支え、私達を守ってくれる大事な灯火である」という事でした。

—だからもう一度始めよう、ブレスから—



作詞者は、なぜ、ブレスからという言葉を入れたのかな？と、はたと思い、ブレス=Breath=呼吸、、、と言葉を並べて、ハッとしました。大病をしてきた私は健康オタクで、予防医学、免疫学の本をよく読むのですが、最近、読み返した免疫学の本の文章とこの言葉が、突如、“Connecting the dots”(点と点をつなぐ。スティーブ・ジョブズ氏の名言)のごとく、ピーンとつながりました。

“免疫力は自律神経次第。自律神経は無意識に働く神経なのでコントロールは出来ないが、唯一、自分で意識して調整できる方法が呼吸。吸う時に交感神経、吐く時に副交感神経が働く。意識して深呼吸をしよう”

そう、ブレス=呼吸は健康維持に劇的な効果を生む。ずっと何年もマスク装着で酸欠・窒息状態だった私達は、正しく呼吸することさえ忘れてしまった。新鮮な空気をブレス(深呼吸)して、脳、肺の隅々まで酸素を送り込み、細胞を生き返らせて、新しい時代の幕開けを、明るい希望と共に再スタートをしようと思います。作詞者の江村さん、伝えたかったメッセージはこういうことでしたか？もしも、解釈、間違っていたらごめんなさい！いつか、どこかでバツリお会いできたら、是非、真意を教えてください！！いや、信長貴富さんも江村さんも、世田谷区にご縁とゆかりのある方々なので、映えある世田谷区民会館改装後初の定期演奏会にゲストでご招待するなんて事は難しいでしょう

か！？（我ながら名案！）

まずは、ソプラノの皆さん！団長の神保さんに、“どうにかなりませんか？”と“色づいた目”で熱〜く見つめて下さい。アルトも一拍おいて（様子見）加勢します！！

—終わることのないボクの歌—

世界情勢は刻々と変わっており、私たちの暮らしも変わり続け、きっとこの先も変化していくことでしょう。次にどんな時代が来ても、そしてそれにまた試練が伴ったとしても、心に歌を持ち続けることは、決して忘れずに生きていきたいと思います。



🍉 2024.08.10. 東京都合唱祭 講評者講評 🍉

★非常に気持ちのこもった、とても素敵な演奏でした。いつもの練習も楽しく仲良くされているのだらうと思う。温かい音色のうたでした！これからも、ずっとずっと演奏をつづけてくださいね！（森永純一）

★女性の声が若々しく男性とのマッチングが良い。大人数合唱団らしくおおらかな歌声に幸福感を感じます。衣装も自由でいいと思います。9月にフォーレクとのこと、ご盛会を心よりお祈り申し上げます。（辻端幹彦）

★各パート各々の深みを持った歌声と、歌うことを楽しんでいる姿に朗らかな気持ちになりました。だんだんと響きが鳴ってきた歌で初めの女性 unison から混声でのハーモニーとなる所も十分に響かせられるといいですね。歌いだしの発語もより明確に。ダイナミクスの付け方が見事で聴き映えていました。これからもよい歌を！（中原勇希）

★沢山の仲間と楽しい時間をお過ごしなのだと思います。人数のわりにホールが鳴らないのは、発声にもう少し気をおつけになるといいかと、おせっかいですが。ラテン語を歌われる時はもう少し母音をたてになさるといいと思います。ボクはウタの「a」の母音。（渡辺宏子）

★「ボクはウタ」様々な表情を感じる演奏でした。唄い手さん一人一人が“詩”の意味を感じ共感しているからこそだと思います。たいへん好演です！！（淵上千里）

★歌い手の皆さんの表情から歌うことへの喜びが感じられ、それが音に表れていました。曲の起承転結の「転」の場面、言葉へのこだわりが強まり、シリアスさが見事に見えました。（石橋遼太郎）

★曲にぴったりの、明るい表情がたくさん見えて、安心感 MAX！です。しっかりと男声が支えとなっていて、良いハーモニーがずっと鳴り響いていて、気持ちの良い時間でした♪ダイナミクスの幅もしっかりとあり、パフォーマンスも大成功です！（大貫浩史）



✿ ボランティア企画会よりご報告させていただきます ✿

6月20日(木)、世田谷区上馬5丁目にある'ライフタイム上馬 デイサービスセンター' に於いて、第214回おたコンを開催致しました。集合時間12時30分、一通り練習をし、演奏時間14～15時です。

・花のまわりでを歌って入場、MCは団OG矢口さん、挨拶は篠田おたコン代表と神保運営委員長です。

前半は、音楽で回る世界旅行(猪瀬添乗員)で・ふじの山・カチューシャ・エーデルワイス

・おおシャンゼリゼ・サンタルチア・大きな古時計を聞いて頂きました。

ソロタイムは・マイウェイ(篠田)・ジョバンニ日本語バージョン(神保、添田)、ここで休憩。

後半は、一緒に歌いましょうコーナーです。・フニクリフニクラ→鬼のパンツ・浜辺の歌

・この広い野原いっぱい・バラが咲いた・高原列車は行く・上を向いて歩こう(アンコール)を団員が歌い、続けて利用者の皆さんが歌詞表を見ながら歌いました。

プログラム曲が終わり、代表挨拶後続けて・今日のひととき、ここまでで1時間いっぱいいっぱい、終了です。

今日もやりきったという思いで施設を後にします。

秋の定演に向けて「おたコン活動」はしばらくお休み、帰りに近くのカストでお疲れ様でした会、楽しいお喋りをして帰途につきました。

次回のおたコン練習は、9月12日木曜日、響堂ホールにおいて15時～17時です。



編集後記

東京都合唱祭では、講評者の先生方や他の合唱団の皆様からあたたかい感想を頂きました。ダイナミクスの幅や、力技では押さないハーモニーといった日頃から先生方に指導頂いている点を評価頂けたのはうれしいです。定演まであまり時間はありませんが、さらに磨きをかけていきたいと思います。

富野

